の子を比較して、子育て競争をしてしまう」などが、「大阪レポート」では見られなかった育児不安の原因として浮かび上がっていることがわかる。そして、育児不安が子育ての負担感を増大し、いらいらして子どもに体罰を加える原因になったり、子どもと離れたいという気持ちを引き起こしていることがわかった。このように今回の調査では、育児不安について「大阪レポート」からさらに一歩進んだ理解が得られている。

図 C-5-7 「育児のことで今まで心配なことがありましたか」と「お子さんと離れたい、と思うことはありますか」とのクロス集計結果（2003 年 兵庫 1歳6か月児健診）

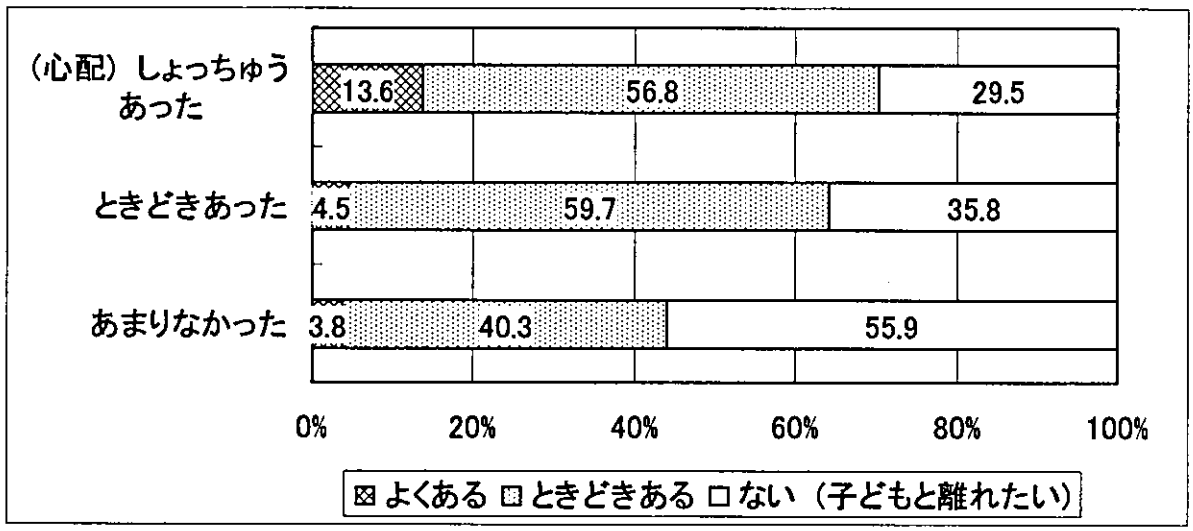
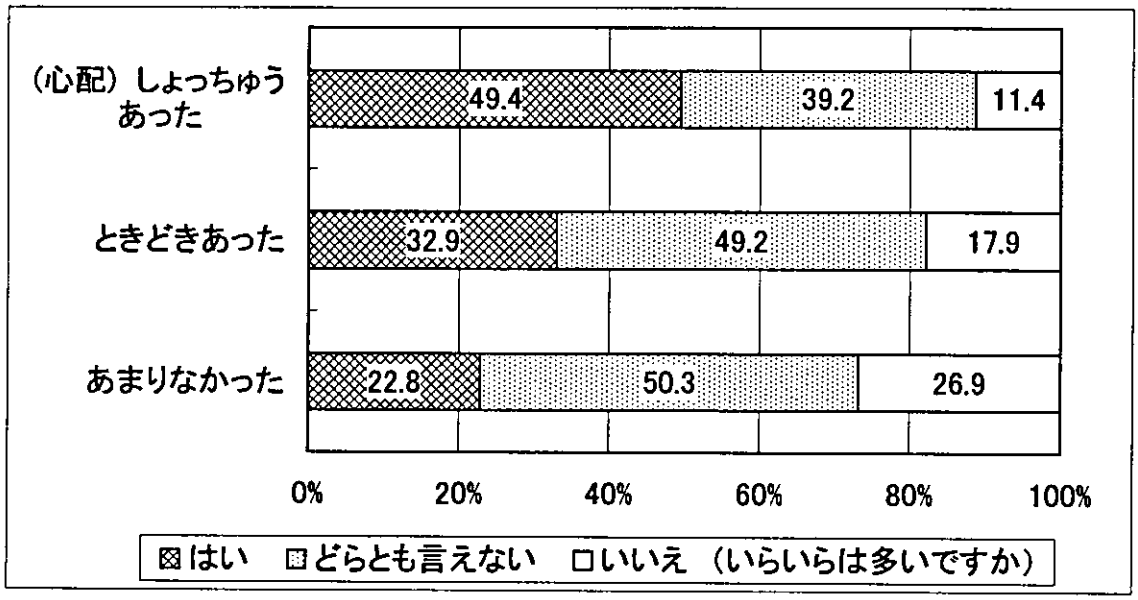


図 C-5-8 「育児でいらいらすることは多いですか」と「育児のことで今まで心配なことがありましたか」とのクロス集計結果（1歳6か月児健診）（2003 年 兵庫）



Ｃ－５－５　“親と親をつなぎ、親を育てる”取り組みの必要性

「赤ちゃん（お子さん）にどうかかわったらいいのか迷う」「育児に自信がもてない」という訴えも親になる準備ができにくい現代日本を象徴するものである。そして、そのように訴える母親の育児不安は高くなっている。しかし、日常的な営みである育児に関して、保健師や保育士などの専門職がいちいち答えるということは物理的にも内容的にも不可能なことである。これらの悩みについてはグループ子育ての中で、親どうしで学び合うことが必要である。これについては、児童虐待予防対策⑧**「親どうしが安心して話ができ、支えあえるグループ子育ての推進」**として、すでにあげたところである。筆者は、育児不安の解消には親どうしの自主的なグループ子育てしかないのでは、と数年前までは考えていた。しかし、カナダや米国の取り組みを見る機会があり、日本においてももう少し積極的に“親どうしの学びの場”をつくり、親育てプログラムを実践する時期になっているのではないか、と最近は考えている。そして、「ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西」として、平成１５年度よりカナダの親支援プログラム“Nobody's Perfect”に取り組んでいる（ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西：http://www9.big.or.jp/~kokoro-i/。資格認定機関「Nobody's Perfect Japan」：http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/　参照)。この取り組みは今急速にひろがりつつある。

「大阪レポート」では育児不安の原因として⑤「近所に母親の話し相手がいないこと」があげられた。ところが今回の調査では、「近所の話し相手の有無」と育児不安とは相関がなかった。後述するように、「育児サークルへの参加の有無」も育児不安とは相関関係はなかった。このことは、近所の話し相手やサークルでのつながりが、表面的に流れているためか、育児不安の解消にはなっていないことを示している。今後の子育て支援としては、子育てサークルなどのつながりが親たちの精神的安定につながるようにサポートする必要がある。そのためには“Nobody's Perfect”を運営するファシリテーターのような人材がサークルなどに入り、“親と親をつなぎ、親を育てる”という視点から意識的に支援することが必要になっているのである。そして、グループ子育てのよさが真に発揮できるようなサークルにしていく必要である。ここから浮かび上がる児童虐待予防策は

児童虐待予防対策⑨：親と親を積極的につなぐコーディーター・ネットワーカーの育成

である。児童虐待予防策⑦**「従来型の相談窓口とは一味違った、親が子育てや子どものことについて気軽に相談できる場の確保」の場合と同様に、「子育てアドバイザー」「子育てコーディネーター」などの人材養成はすでになされてきた。しかし、ほとんど機能していない。人材養成講座の内容もさることながら、養成した人材の活用方法も含めて再検討が必要ではないだろうか。**

Ｃ－５－６　次世代の親育ての必要性

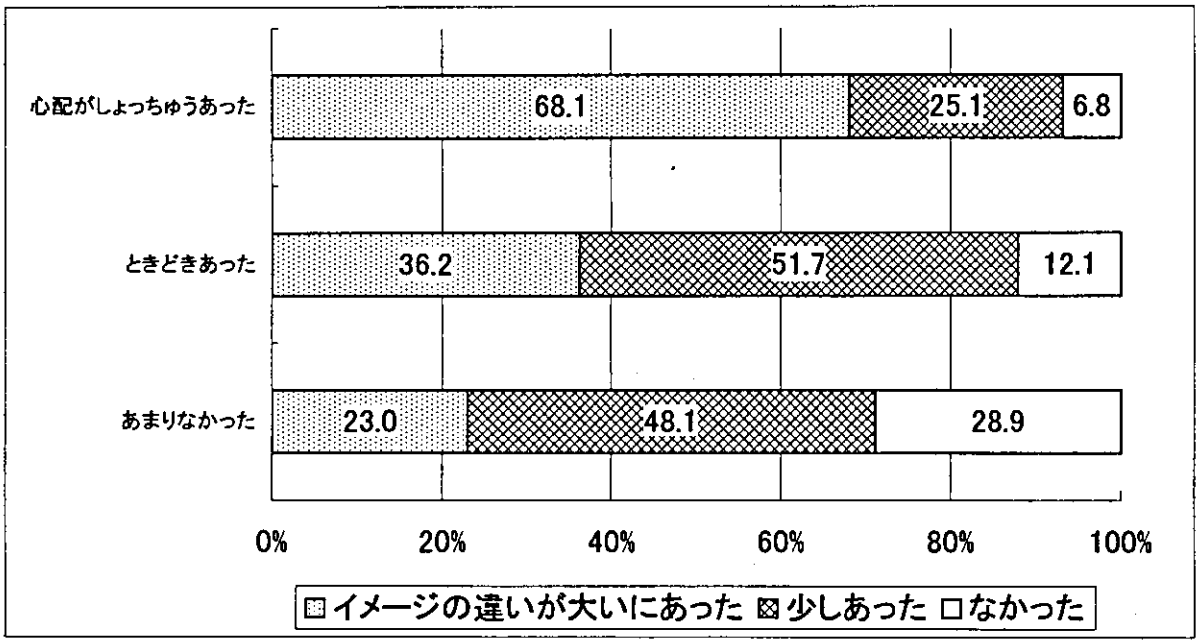
図 C-4-1 に示したように、自分の子どもをもつまでにイメージしていた育児が現実

の「育児と大いに違った」と答える母親は、３人に１人にも達している。このことは、少女・娘時代に子育て中の親子を見る機会が減少し、親になるための準備ができにくくなった現代日本を象徴している。図 C-5-9 に「自分の子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは違いはありましたか」と「育児のことで、今までに心配なことがありましたか」とのクロス集計結果を示す。図からわかるように、「しょっちゅう心配だった」という母親の６８．１％が育児に関するイメージと現実のギャップが「おおいにあった」と答えている。一方、心配が「あまりなかった」という母親では、育児に関するイメージと現実とのギャップが「おおいにあった」は２３．０％にすぎない。このように、育児に関する「イメージと現実のギャップ」が育児不安の原因として極めて大きいことをあらわしている。この結果は、今子育て中の親への支援だけではなく、現在学齢期にいる小・中・高校生など次世代の親たちを育てる取り組みがいかに大切かを示している。現在も試験的にいくつかの試みはあるが、真に実行のあるプログラムの開発が急務であろう。ここから浮かび上がる児童虐待の予防策は、児童虐待予防対策④「小・中・高校生や大学生など、将来親になる世代が乳幼児と触れ合う機会を意識的に作り、親になるための準備性をはぐくむこと」と重なる部分もあるが、

児童虐待予防対策⑩：小・中・高校生など次世代の親たちを育てるプログラムの開発とその積極的な実施

である。

図 C-5-9「自分の子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは違いはありましたか」と「育児のことで今まで心配なことがありましたか」とのクロス集計結果(3歳児健診)(2003 年　兵庫)



次世代の親育ての重要さは、前述の「大阪レポート」であげた育児不安の要因①③、すなわち「母親が子どもの欲求を理解できないこと」や「母親に出産以前の子どもとの接触経験や育児体験が不足していること」が育児不安の原因になっていること、からも言えることである。

C－5－7　“育児不安の解消” は、子育て支援・児童虐待予防のキーワード

育児不安が招く項目として、「お子さんと離れたい、と思うことがありますか」「育児でいらいらすることは多いですか」「子育てを大変と感じますか」という３つの項目が浮かび上った。育児不安の高い母親は「子どもと離れたい」という欲求が強いことがわかったが、四六時中拘束されている在宅の母親にとっては、それは当然の欲求ではないだろうか。この結果からは、母親を母子カプセル状態から解放し、母親自身の時間が持てるような支援の必要である。
また、育児不安が高い母親は、子育てでのイライラ感や負担感が極めて強いことがわかっているが、逆にみると、育児不安を解消することにより、子育てでのイライラ感や負担感がかなり緩和されることが予測できる。子育てでのイライラ感や負担感は児童虐待の誘因であり、ベースをなすものである。現代日本において育児不安の解消がいかにたいせつかがわかる。このように“育児不安の解消”は、児童虐待予防、子育て支援のひとつのキーワードである。

C－6　育児におけるイライラ感などの精神的ストレスと児童虐待

ここでは児童虐待と深い関係がある「子育てにおけるイライラ感」を中心に検討する。

C－6－1　どこで児童虐待が起こっても不思議ではない

図 C-6-1 に「育児でいらいらすることは多いですか」という質問結果を「大阪レポート」の結果と比較して示している。図 C-6-1 から、母親の「子育てにおけるイライラ感」が 20 数年前に比べ、際立って増えていることがわかる。すなわち、「育児でいらいらすることは多いですか」という質問に「はい」と答える母親は、１歳６か月児健診時点では、20 数年前には 10.8%だったものが、今回は 31.8%へと約３倍に増加している。また３歳児健診時点では 16.5%であったものが 42.9%と増え、半数に近い母親が「子育てにおけるイライラ感」を訴えるようになっている。すでに紹介したように子育て中の母子を取り巻く状況は非常に悪く、育児における母親の精神的ストレスは増大している。そのため、どこで児童虐待が起こっても不思議でない状況が生まれているのである。

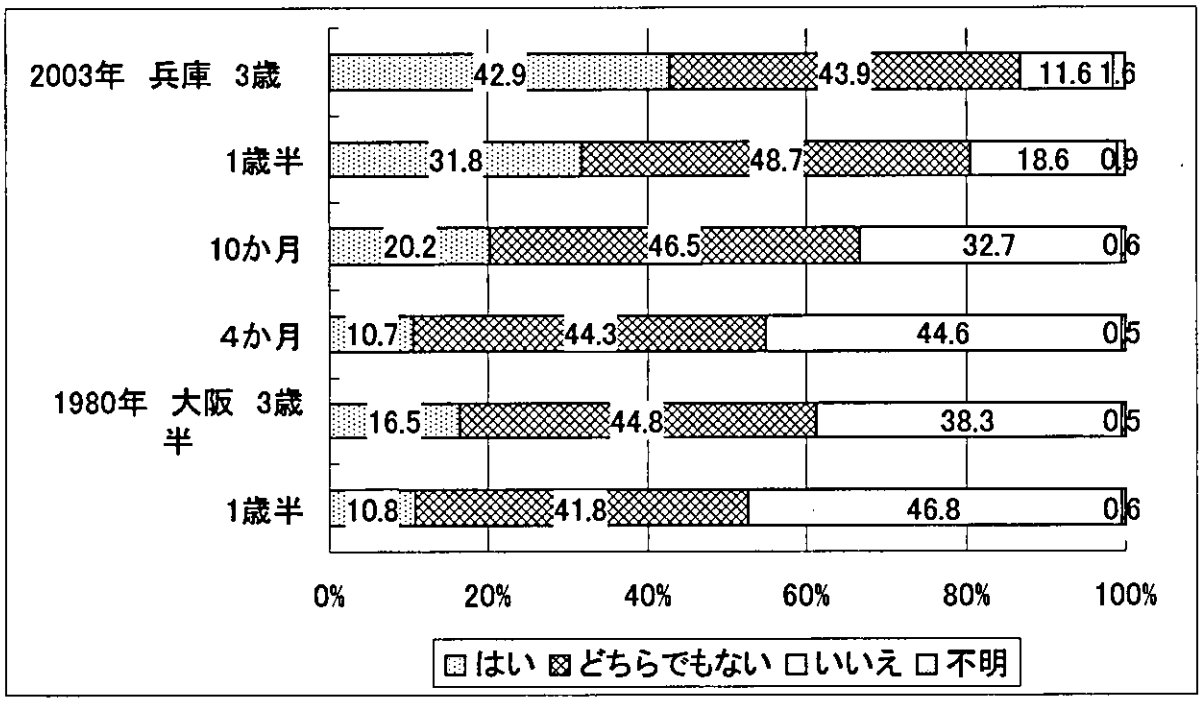
C－6－2　イライラがつのる原因は、単に経験不足だけではない

どのようなことがイライラの原因になっているのであろうか。「育児でいらいらすることは多いですか」と他の質問とのクロス集計結果では、次のような母親にイライラが多いことがわかった。すなわち、

①子どもの欲求がわかりにくい母親
②子どもとどうかかわっていいか、迷うことの多い母親
③育児に自信が持てないと感じる母親（図 C-6-2）
④子どもを生む前にイメージしていた子育てと現実の子育てとのギャップを感じる母親（図 C-4-2）
⑤育児での心配が多い母親（図 C-5-8）
⑥育児での心配が解決されないまま放置されている母親
に育児でのイライラが多いという結果であった。

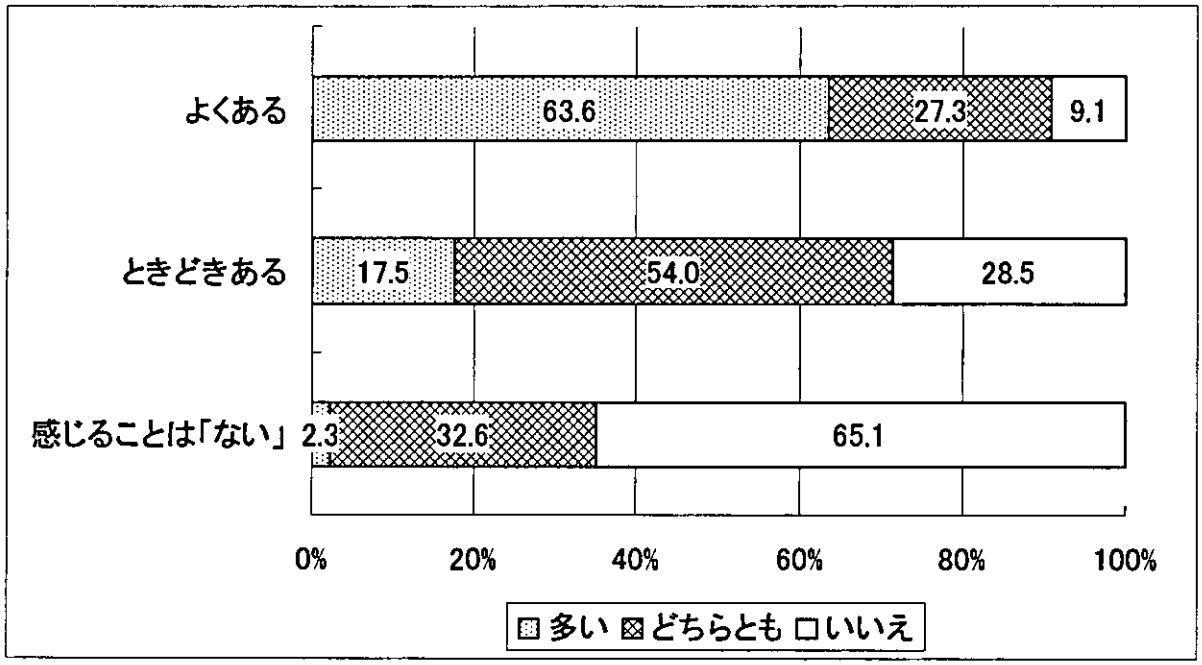
上記①～④は、乳幼児をよく知らないままに親になっていること、少女時代から親になる過程で小さい子どもとかかわる体験が不足していることが原因と言える。また、⑤⑥の育児不安も①～④と同様に、親の経験不足、乳幼児の普通の発達過程を知らないことが大きな原因である。

図 C-6-1 育児でいらいらすることは多いですか



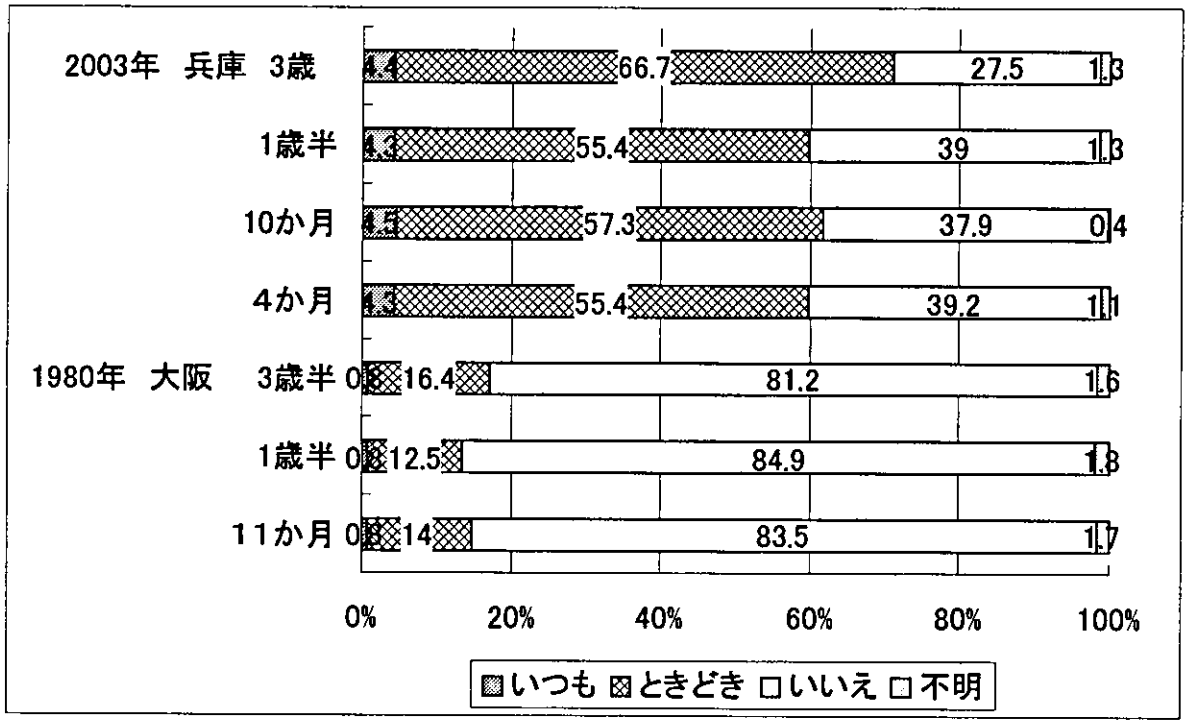
しかし今回の調査結果を検討してみると、子育てでのイライラや不安が母親の経験不足だけで説明できる訳ではないことに気づく。というのは、次のような母親にもイライラが強いのである。すなわち、
⑦自分の思いどおりにもの事をすすめたい母親
⑧育児に努力している自分をほめて欲しい母親
⑨育児に関する他人の評価が気になる母親（図 C-6-3）
⑩よその子と自分の子を比較して気にする母親
⑪子どもがしていることを黙って見ておれなくて、口を出してしまう母親
⑫子どもがしていることを「あれはいけない」「これはいけない」と禁止する母親
である。

図 C-6-2 「育児でいらいらすることは多いですか」と「育児に自信がもてない、と感じることがありますか」とのクロス（兵庫、4か月）



上記項目⑩の「お子さんをよそのお子さんと比較して見ることが多いですか」という質問結果を「大阪レポート」の結果と比較して、図 C-6-4 に示している。図 C-6-4 からわかるように、よその子と自分の子を比較して気にする母親が急増している。

図 C-6-4 お子さん（赤ちゃん）をよそのお子さんと比較して見ることが多いですか



上記⑦～⑨の質問は「大阪レポート」の調査項目にはないために、比較検討はできないが、比較できたとしたら、大きく変化しているのではないだろうか。上記⑦～⑩は、母親の自己実現という欲求と深く関係した項目である。子育てをすることで自己実現の道が閉ざされてしまう現在日本社会の状況が母親に大きな精神的ストレスになっているのである。20 数年前にはあまり表面化していなかったが、自己実現が阻まれることに対する精神的ストレスが現代母親の育児ストレスの大きな特徴なのである。そのため、自己実現については本章第 C-8 節で検討することにする。

夫婦関係も母親のイライラに大きな影響を与えていることがわかっている。すなわち、

⑬子育てについて夫婦で話し合わない夫婦

⑭子育てが片方の親任せになっている夫婦

では、母親のイライラが強くなっている。

C－6－3　育児でのイライラ感が体罰へとつながっている

「育児でいらいらすることは多いですか」と他の質問とのクロス集計結果について、ここまでは母親のイライラの原因について考えてきた。原因と結果とは、必ずしもはっきりと区別できる訳ではないが、次に母親のイライラが結果としてもたらすものについて考える。「育児でいらいらすることは多いですか」と他の質問とのクロス集計結果からは、イライラが強い母親は以下のような傾向があることがわかっている。すなわち、

⑮ 子どもと離れたい、と思う母親（図 C-6-5）

⑯ 罰を使う母親（図 C-6-6）

である。

図 C-6-5 「育児でいらいらすることは多いですか」と「お子さんと離れたい、と思うことはありますか」とのクロス（3歳）

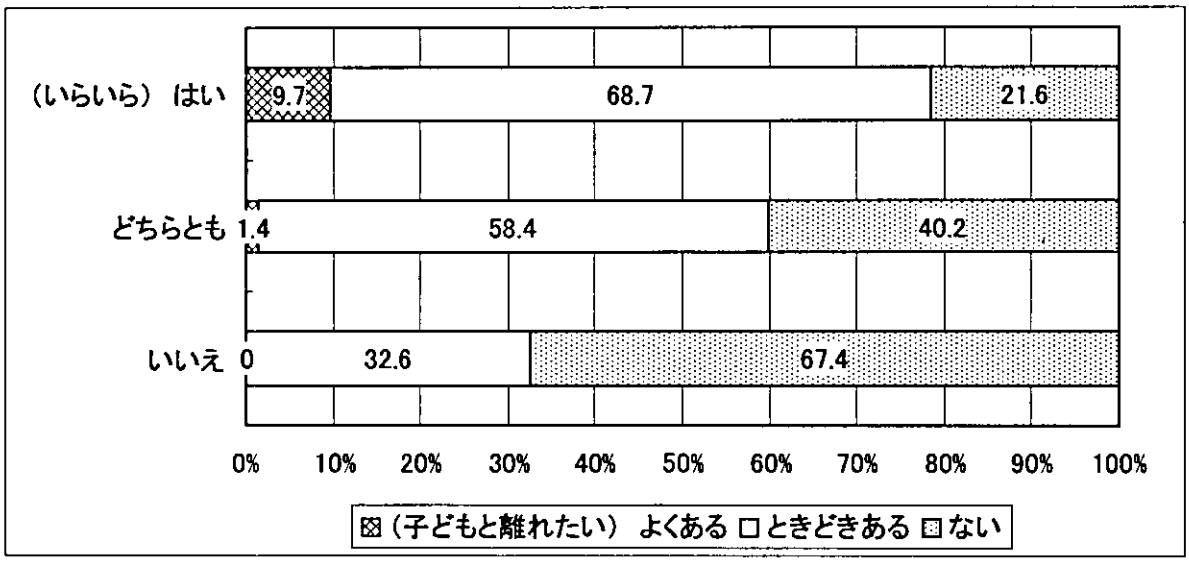


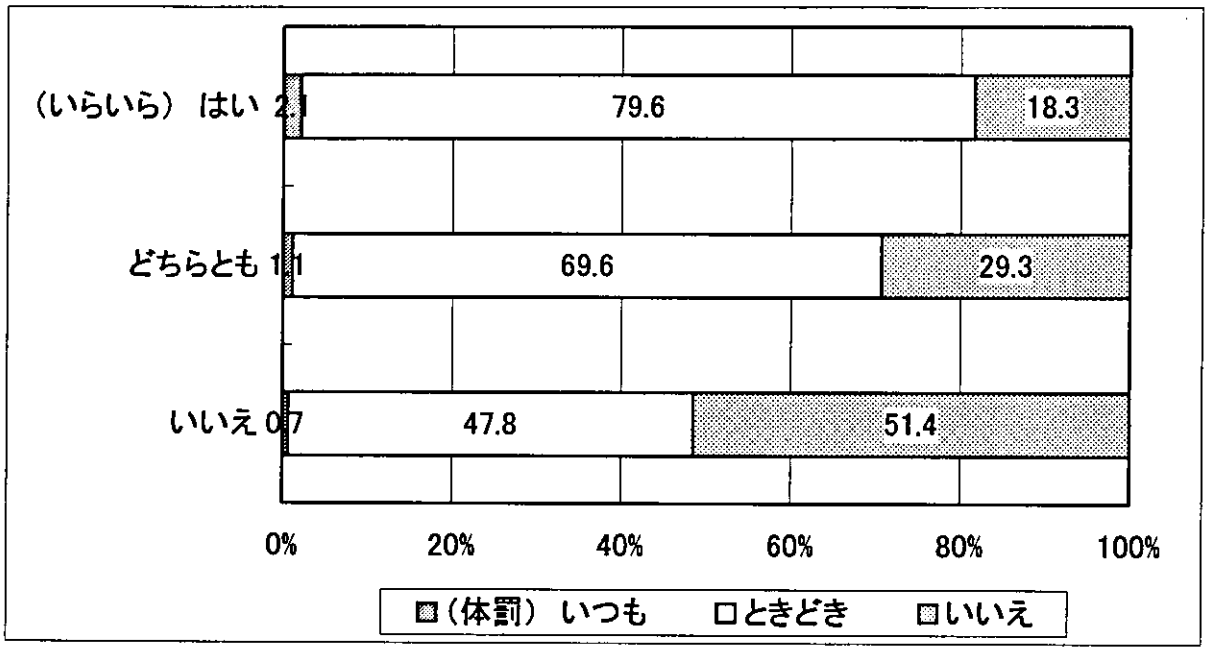
図 C-6-6 のクロス集計結果からわかるように、イライラしている母親は体罰を多用している。体罰に関しては、「あなたはお子さんを叱るとき、たたく、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか」という強い表現で訊ねている。にもかかわらず、「はい（いつも、ときどき）」と応える母親が、4か月児健診３．８％、10か月児健診１４．２％、１歳６か月児健診４７．３％、３歳児健診６４．３％と驚くほど多い。体罰を使う母親の特徴は本章第 C-7 節でも検討するが、体罰は児童虐待と直接的に関係するものである。

⑰「この子を産んでよかったと思いますか」という質問に「はい」と答えられない母親

⑱　「この子とはなんとなく気があわないように思う」母親

にも、イライラ感は強かった。

図 C-6-6　「育児でいらいらすることは多いですか」と「お子さんを叱るとき、たたく、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか」とのクロス（3歳）



Ｃ－６－４　誰か、私の虐待に気づいて欲しい！

―「子どもと離れたい！」は、母親のSOSか ―

「子どもと少しの間でも離れたい！」という声を多くの母親から聞く。四六時中子どもと一緒にいる母親にとって、それは当然の欲求だと思う。しかし、一般にはそのようには理解されていない。「子どもと離れたい！」という欲求が強い母親は、育児不安が高いことを先に述べた。図 C-6-5 に示すように、「子どもと離れたい！」という欲求が強い母親は、イライラを強く感じているがわかる。現に虐待をしている親自身、何とかして虐待をやめたいと考えているものである。それが「子どもと離れたい」という欲求になって表れている可能性もある。最近、こんな事例があった。

その母親は、３歳くらいの女の子とまだ歩きだす前の赤ちゃんを連れて、１か月ほど前から毎日のように市役所の１階ホールに来ていた。毎日来るもので、市の職員も気はついていたが、特に声をかけることもしていなかった。朝１０時すぎには姿をあらわす。しかし、特に何か市役所に用事があるというのではなく、出たり入ったりしながら３時近くまでロビーで時間を過ごしていた。そんなある日、市民から「市役所の裏庭で子どもをひどく叩いている母親がいる」という訴えがあり、居合わせた保健師が見に行くとその母親だった。聞くと、家では３歳の娘を毎日ひどく叩いてしまったり、風呂で溺れさせそうになるとのこと。こんな自分が怖くて、できるだけ人のいる場所にいるようにしているのだけど、今日はそれでも自分の感情を押さえきれず叩いてしまったという。

この母親は毎日市役所に通うことにより「虐待をしている自分を誰か見つけて、助けてほしい」と、無意識的に訴えていたのではないだろうか。

別の虐待事例であるが、たどってみると、過去３回の健診で、３度とも「イライラするんです」と訴えていたとのこと。保健師は「なぜ母親のＳＯＳに気づかなかったのか、と反省してるんですけど‥‥、どうやって母親のＳＯＳをキャッチしたらいいのでしょうか」という相談を受けたことがある。

このように虐待をしている母親は、「それはいけないことであり、何とかやめたい」と思っている人が多いものである。日頃は子どもをかわいいと思っていても、夫婦の喧嘩や舅・姑とのいさかい、近所とのトラブル、自分の将来への不安等々から、子どもに強く当たってしまう。子どもが泣けば、なんでそのくらいのことで泣くのかと腹が立ち、おびえる子どもの顔を見て逆上し、暴力はエスカレートする。あるいは、叱っても泣かない子どもに、「かわいくない」と腹が立ち、泣くまで叩いてしまう。子どもの泣き声にあおられるように暴力がエスカレートして止まらなくなる、というのがよくあるパターンである。冷静になると、そんな些細なことで、なんでそこまで小さな子どもを叩いてしまったのか、と自己嫌悪に陥る。自分ではどうしようもない怒りの暴発におびえ、母親は意識して、あるいは無意識にＳＯＳを発する。しかし、「私は子どもを虐待しています」とは言えず、時間が過ぎてしまうのである。

母親のストレスの原因は、子育てそのものにあるとは限らない。むしろ、ほんとうの原因は、夫婦関係とか、自己実現が閉ざされていることに対するイライラである場合が多い。そして、怒りは弱者である子どもに向かう。ここから浮かび上がる児童虐待予防策は、

児童虐待予防対策⑪：母親自身の時間が持てるような子育て環境の整備

である。

「子どもと離れたい」という欲求は、「このままでは虐待してしまう」という母親のＳＯＳである場合がある。そして、以下で述べるように、子育てサークルへの参加が３歳児健診時点で２６％という驚くべき数値も、「母子カプセル」状態の危うさを何とか回避したい、という母親のＳＯＳの場合もあると考える。

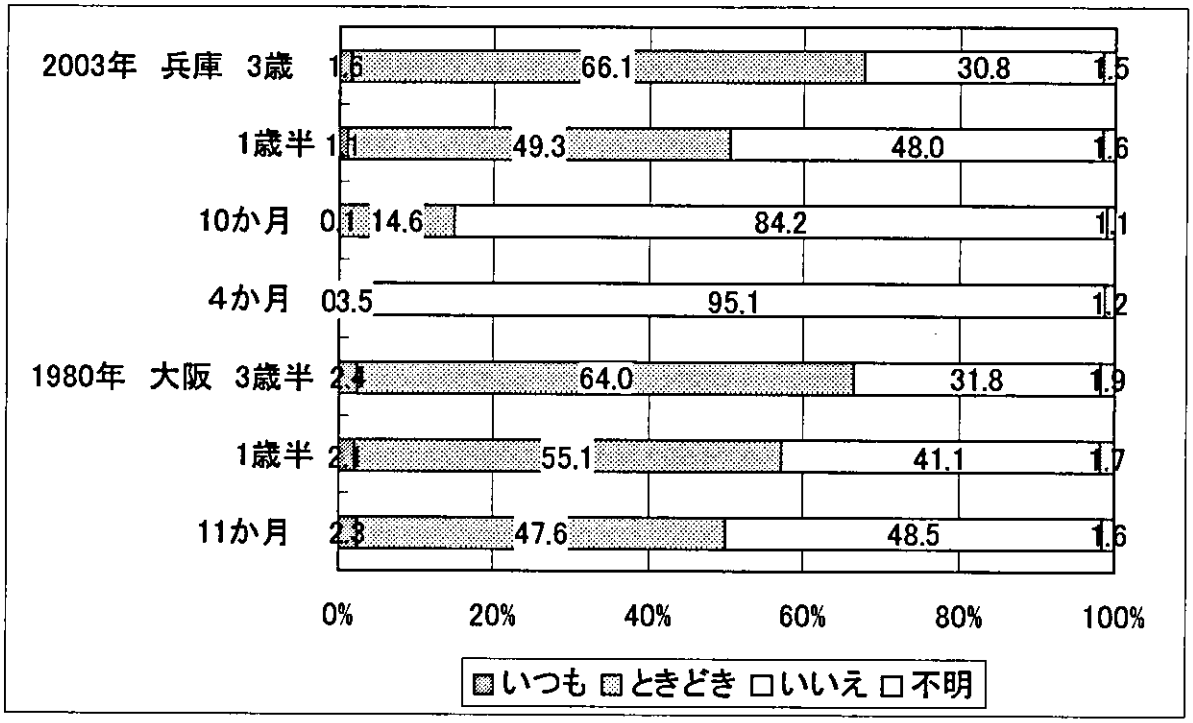
C－7　体罰を用いる親の特徴

この節では、身体的虐待と最も関係が深いと考えられる「体罰傾向」について考える。その中で、体罰を使用する母親の特徴を調査データから明らかにしたい。

C－7－1　体罰傾向の強い日本の親たち

図 C-7-1 に、「あなたはお子さんを叱るとき、たたく、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか」（「大阪レポート」では、「子どもをしかる時、打つとか、つねるとか、しばるというような体罰を用いますか」）という質問結果を示す。「大阪レポート」の分析の過程では、あまりにも多い体罰の使用に驚き、それも一因で、当時の子育てを「育児不安と母性性の危機」と特徴づけた。図 C-7-1 での「大阪レポート」と「兵庫レポート」との比較からわかるように体罰傾向は相変わらず強い。今回の調査結果を「大阪レポート」を比較するとき、３歳児健診時点ではほとんど同じであり、３人に２人という多くの母親が体罰を使用している。月齢の少ない時期の体罰は今回の調査の方が「大阪レポート」より少なくなっている。しかし、１歳６か月児健診では半数の母親が体罰を使用している。４か月や 10 か月の赤ちゃんにも体罰を使う母親がかなりあり、非常に気になる結果である。

図 C-7-1　あなたは赤ちゃんを叱るとき、たたく、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか



一方、10 か月児健診での体罰は、「大阪レポート」の 11 か月児健診での結果よりも大幅に少なくなっている。カナダでの状況を聞くと、母親が子どもを叩いているということを聞くと必ず通報するそうである。親支援プログラム“Nobody's Perfect”では親が安心して話ができる場を提供することを最もたいせつにしている。そのような

プログラムの中でさえ、母親が子どもを叩いているということを聞くとファシリテーターは虐待として通報をするのだそうだ。「日本では体罰傾向がつよく、カナダのようにはいかない」ということを説明すると、「カナダでも 20 年くらい前まではそうであった」とのこと。日本でも、一刻も早くそうなることを願わずにはいられない。

よく「体罰を使わないで、どうやってしつけるのですか」と聞かれることがある。しかし、しつけと体罰とは直接的には関係がない。体罰で「してはいけないこと」が理解できるということがない訳ではないが、体罰の弊害の方が大きく、危険な方法である。体罰を使わなくてもしつけられる子育てのスキルを親が身につけることも必要であろう。ここから浮かび上がる児童虐待予防策は

児童虐待予防方策⑫：体罰を使わなくても済む子育て方法のスキル・アップ

である。

Ｃ－７－２　体罰と他項目とのクロス集計結果

「あなたはお子さんを叱るとき、たたく、つねるとか、けるなどの体罰を用いますか」という質問と他項目とのクロス集計において、χ^2検定から浮び上がった「体罰を用いる母親の特徴」を以下に列挙する。ここに挙げた項目はすべて、０．０％以下水準で相関のあった質問項目ばかりである。なお、カッコ内はχ^2値である。χ^2値が高いほど相関が強いことを表している。

１歳６か月児健診での「体罰を用いる母親の特徴」

① 育児でいらいらすることが多い親（１８０）
② 育児に自信がもてない、と感じることが多い親（１２２）
③ 子どもが何を要求しているかがわかりにくい親（５９）
④ 子どもをかわいいと思えない親（６０）
⑤ 「お子さんと一緒にいると楽しいですか」の問に「はい」と答えられない親（４８）
⑥ 天気の良い日でも、外で遊ばせない親（２９）
⑦ 子育てを大変と感じる親（４０）
⑧ 自分の子どもを持つ前にイメージしていた育児と実際の育児とのギャップを感じる親（３６）
⑨ 自分の親（又は親に代わる人）に、かわいがられなかった親（８１）
⑩ 自分の親（又は親に代わる人）から厳しい体罰を受けたことがある親（８７）
⑪ 子どもと離れたい、と思う親（１１０）
⑫ この子を産んでよかったと思えない親（４５）
⑬ 子どもが同じことをしているのに、ある時はしかり、ある時はみのがしたりする親（６１）
⑭ 子どもがしていることを黙ってみていられなくて、口出しする親（８６）
⑮ 子どもを他家の子と比較して見ることが多い親（３２）

⑯　子どものしていることを「あれはいけない」「これはいけない」と禁止する親（１４８）
⑰　この子とはなんとなく気があわないように思う親（３１）
⑱　「母親の関心事」として「お金（家計）」をあげた親（４３）
⑲　「経済状態についてお聞きします」に、「苦しい」と答える親（２５）
⑳　「育児情報」についてのニーズが少ない親（１５）

３歳児健診での「体罰を用いる母親の特徴」

①　育児でいらいらすることは多い親（１３０）
②　育児に自信がもてない、と感じることが多い親（６３）
③　子どもが何を要求しているかがわかりにくい親（５０）
④　「お子さんと一緒にいると楽しいですか」の問に「はい」と答えられない親（７３）
⑤　子どもにどうかかわったらいいか迷う親（５４）
⑥　天気の良い日でも、外で遊ばせない親（７２）
⑦　子育てを大変と感じる親（４３）
⑧　トイレット・トレーニングについて「まだ考えていない」と答える親（３７）
⑨　食事など何も与えないことがある親（１８）
⑩　食事で気をつけていることとして、「栄養のバランス」をあげる親（２７）
⑪　子どもに話しかけながら世話をしたり、遊んだりしない親（２９）
⑫　おむつや食事の世話以外に子どもと遊んだり散歩したりする時間が少ない親（２９）
⑬　育児のことで今まで「しょっちゅう」心配だった親（４７）
⑭　夫が育児に協力的でない母親（２４）
⑮　夫が子どもと一緒に遊ばない母親（６２）
⑯　自分の子どもを持つ前にイメージしていた育児と実際の育児とのギャップを感じる親（３１）
⑰　自分の親（又は親に代わる人）に、かわいがられなかった親（　）
⑱　自分の思い通りにものごとをすすめたい親（２９）
⑲　子どもと離れたい、と思う親（５５）
⑳　この子を産んでよかったと思えない親（４３）
21　育児で不安になることが多い親（５２）
22　子どもが同じことをしているのに、ある時はしかり、ある時はみのがしたりする親（１０７）
23　子どもがしていることを黙ってみていられなくて、口出しする親（１５７）
24　子どもを他家の子と比較して見ることが多い親（５２）
25　子どものしていることを「あれはいけない」「これはいけない」と禁止する親（１３７）
26　この子とはなんとなく気があわないように思う親（４４）
27　叱るとき、顔や頭などをたたいてしまうことがある親（４０９）

28　叱るとき、ものを使ってたたいてしまうことがある親（４８）
29　「母親の関心事」として「お金（家計）」をあげた親（４３）

体罰傾向と相関がなかった質問項目

一方、１歳６か月児健診および３歳児健診ともに、体罰傾向との相関関係が認められなかった項目の中で、本研究で注目していた項目を以下に列挙する。

① 育児の手伝いをしてくださる方はありますか
② 近所でふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人がいますか（「近所の話し相手」）
③ 親子で一緒に過ごす子育て仲間がいますか（「子育て仲間」）
④ 育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのは好きですか（「話し好き」）
⑤ 育児サークルに参加したことがありますか（「子育てサークル」）
⑥ あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さいお子さんを抱いたり、遊ばせたりした経験はありましたか（子どもとの接触体験）
⑦ あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さいお子さんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか（育児体験）
⑧ 家族構成
⑨ 住居形態

本研究では、ひとつの視点として「近所の話し相手」「子育てサークル」などセルフヘルプ・グループに注目してきたが、体罰傾向とは直接関係がないことがわかった。

Ｃ－７－３　虐待の世代間連鎖

「自分の親（又は親に代わる人）に、かわいがられなかった親」「自分の親（又は親に代わる人）から厳しい体罰を受けたことがある親」が自分の子どもの子育てにおいて体罰を使う傾向が極めて強い（ｐ＝０．０００）ことが１歳６か月児健診でわかった。３歳児健診でもそのような傾向は認められた。このことは、一般に言われている虐待の世代間連鎖を示唆するものである。３歳児健診でその傾向が不明確であったのは、体罰の使用が３人に２人とあまりにも一般化してしまっているがために、親の生育歴は表面化しなかったものと考えられる。

この結果から浮かび上がる児童虐待予防対策は、

児童虐待予防対策⑬：子育てにおける体罰の弊害についての啓発活動の展開

である。この点については、体罰を使うことの弊害についての啓発とともに、体罰を使わなくても済む子どもとのかかわり方を伝えることが必要である。後者については、児童虐待予防対策⑫「体罰を使わなくても済む子育て方法のスキル・アップ」としてすでに挙げている。

Ｃ－７－４　児童虐待の潜在的危険因子 ― 「望まない妊娠・出産」と貧困 ―

児童虐待の予防を考えるとき、虐待の潜在的危険因子（リスク・ファクター）を考えることが重要である。本調査からは、潜在的リスク・ファクターとして「望まない妊娠・出産」と貧困が浮かび上がっている。すなわち、「このお子さんを産んでよかったと思いますか」という質問に「はい」と答えられない母親に体罰傾向が極めて強い。また、「母親の関心事」として「お金（家計）」をあげた親、および「経済状態が苦しい」と答える親に体罰傾向が極めて強いことが判明している。

「望まない妊娠・出産」と貧困という児童虐待のリスク・ファクターは、一般に言われていることである。これらの結果から浮かび上がる児童虐待予防対策は、

児童虐待予防対策⑭：望まない妊娠を防ぐ性教育の充実

児童虐待予防対策⑮：子育て家庭の経済的安定化を図る若者施策の充実

である。

性教育については、「望まない妊娠を防ぐ」というだけではなく、エイズ予防の観点からも急務である。ＷＨＯが日本におけるＨＩＶ感染爆発の危険性を指摘しているように、日本の若者の性の実態は想像をはるかに越えて深刻化している。ちなみに、2003年１年間に人工妊娠中絶した18歳の女性の数は、18歳女性人口の５０％にも達しているという驚くべき実態が厚生労働省から発表された。このように日本人の若者の間では性に関する価値観が大きく変わり、性行為も活発に行われている。そして、若者自身は性に関する正確な知識を求めている。にもかかわらず、大人社会が若者の性の実体を正視しようとしないところに問題がある。実効のある性教育は、エイズ対策とあわせて急務になっている。

経済的貧困の問題は、若者施策としてとらえる必要がある。2004年秋に「フリーター、４１７万人の衝撃」というＮＨＫスペシャルが放映された。その中でも明らかにされたように、個々の企業は低賃金の労働力、雇用調整などで若者をフリーターとして便利使いしている。しかし、国全体の施策としては、それでいいのだろうか。欧米ではかなり以前から若者施策を国の重要な施策として展開している。[5] 日本の場合、10数年前までは若者の問題がそれほど表面化していなかったこともあり、取り組みが遅れている。児童虐待の予防という視点からも「若者施策」を真剣に考える必要がある。

Ｃ－８　現代母親の精神的ストレスの新たな原因
― 「自己実現」と「親役割」の狭間で悩む母親たち ―

本研究が明らかにした最も大きい点は、母親の精神的ストレスの原因が変わってきていることを解明した点ではないか、と考えている。このことについて本節では取り上げることにする。

Ｃ－８－１「自己実現」を目標に育てられてきた世代

以上述べてきたように今回の調査では、現代の子育て実態が２０数年前の状況と大きく変わってきていることが明らかになった。変わった点として、母親の精神的ストレスが非常に増大していることがあげられる。その原因としては、子育て中の「母子の孤立化」や育児に関する体験不足のため「親が子どもを知らないこと」、子育ての負担が母親のみにかかっていること、などがあげられる。これらのことは1980年の「大阪レポート」でも母親の精神的ストレスの原因としてあげられてきたものである。しかし、今回の調査では我々の想像を越えてさらに深刻化していることが判明した。一方、「大阪レポート」であげられた原因だけでは現代の母親の精神的ストレスは説明がつかないことも明らかになっている。そのことについて、ここでは検討をしたい。

今の世代は、男女ともに「いかに自分のしたいことを実現するか、自分の夢をかなえるか」「きっと自分のしたいことが見つかるはずだ。自分の能力を最大限活かして、他の人とはちがうあなただけの人生を生きなさい」、という「自己実現」を目標に育てられてきた世代である。ＮＨＫ朝の連続ドラマのどれを観ても「自己実現」がテーマである。ところが、現代日本の子育ては「自己実現」とは対極の「自己犠牲」という側面が強い世界である。育ってきた価値観とまったく逆なのである。そのあたりが現在日本において、子育てが非常にしんどくなり、かつ少子化が急速に進行する大きな要因の一つである。そのことが「兵庫レポート」では判明している。

Ｃ－８－２　他者からの評価が気になる現代の子育て世代

1950年代の子どものいる風景写真を集めた『雪国はなったらし風土記』[6]という写真集がある。この写真集の写真には、１歳過ぎの子をおんぶして子守りをしている５・６歳の幼児をはじめ、子どもたちが子守りをしている写真や、地域の子ども集団の中でイキイキと遊ぶ子どもたち、無くてはならない小さな労働力として家の手伝いをする子どもたちの姿が写されている。1950年代と言えば、つい５０年前にすぎない。にもかかわらず、日本社会の変貌の大きさを改めて認識させられる。この当時の子どもたちは親に育てられているというよりも地域の子ども集団の中で育っていることがよくわかる写真集である。大人はほとんど登場しないのである。現代の子育て環境が変わったことを理解する上で貴重な資料である。

この写真集に登場する子どもたちが初代専業主婦のおわり頃の世代（現在、６０歳代の世代）である。この世代は、幼少期には同世代の子ども集団の中で育ち、自分の弟や妹などの子守りも当たり前のようにしてきた世代である。そのため、都会に出てきて、専業主婦になっても、家事にはたけているし、子育てに戸惑うことはなかったのである。ところが今の子育て世代は、同じ専業主婦と言われても、初代専業主婦とはまったく生育環境のちがう中で育った世代である。専業主婦に育てられた世代であり、つねに親や大人の視線の中で育った世代である。そのためか、親や先生など他者からの評価がすごく気になるのである。図 C-8-1 に「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」という質問結果を示している。図からわかるように、４０％前後の母親がはっきりと「他の人の評価が気になる」と答えている。逆に「気にならない」は、１５％前後と少ない。

図 C-8-1　「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」（兵庫、2003 年）

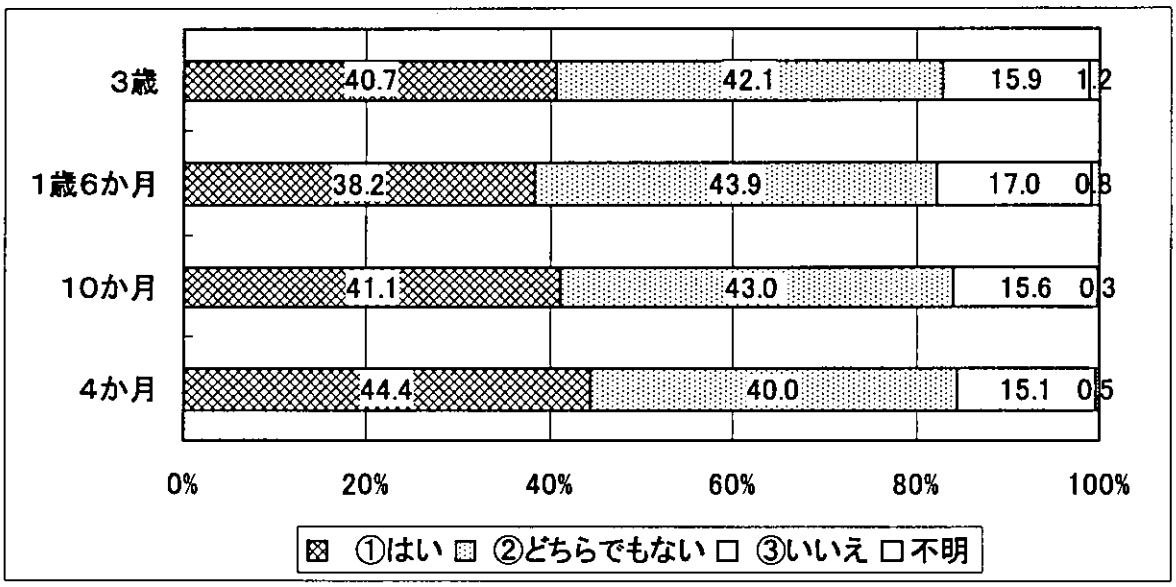


図 C-8-2 に「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」という質問結果を示している。半数近くの母親が「はい」と答え、自分の子育ての努力を「ほめて欲しい」とはっきりと訴えている。一方、「いいえ」は６人に１人程度と少ない。

図 C-8-2　あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか。

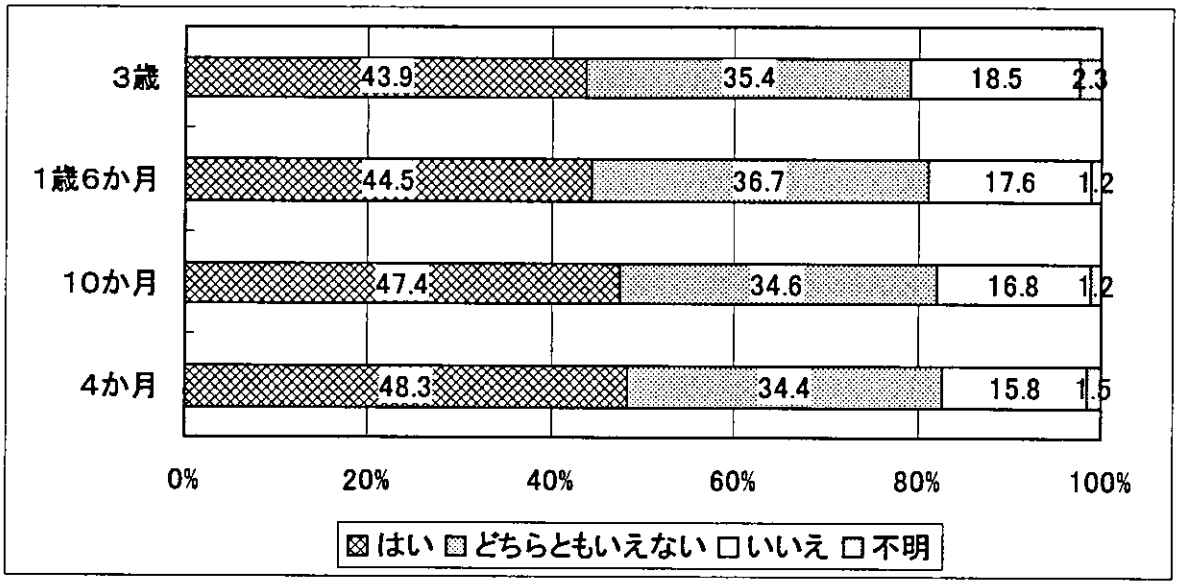
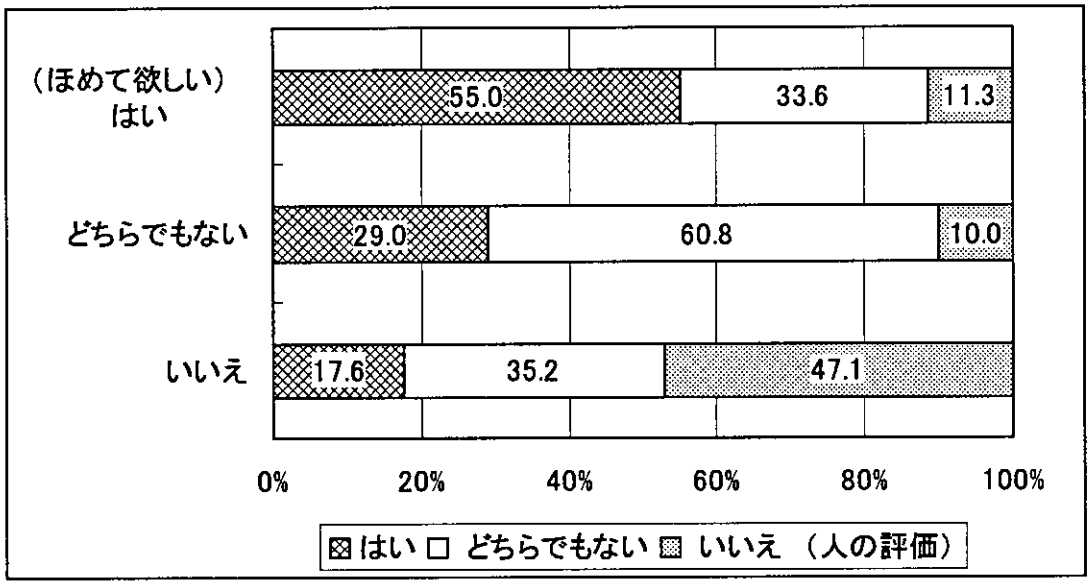


図 C-8-3 に、「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」という質問と「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うこと

がありますか」とのクロス集計結果を示す。図からわかるように、他の人の評価が気になる人ほど、「ほめて欲しい」という欲求が強いことがわかる。

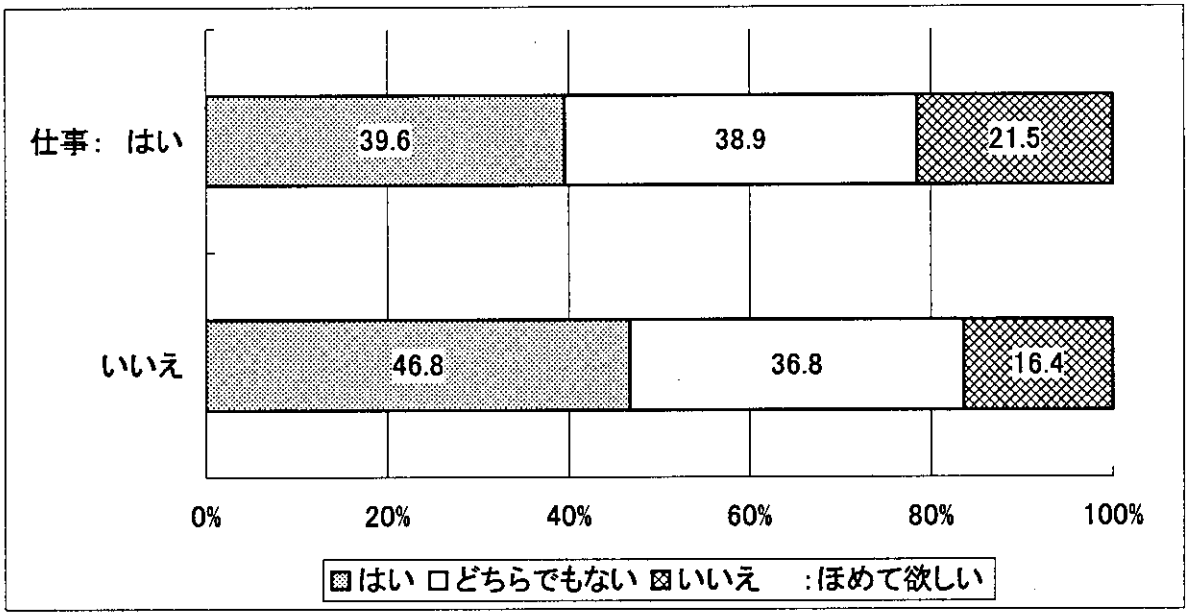
図 C-8-3 「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」という質問と「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果（兵庫、１歳６か月児健診）



しかし現実には、母親なんだから、「子育てして当たり前」という感覚は根強いものがある。特に専業主婦の場合、「一日中家にいて、子どもの相手をしてるだけなのだから、楽だろう、暇だろう」と思われがちである。そのため、四六時中休みなく子どもの世話をしていても誰からも褒められないのである。このような事態は今の子育て世代には耐え難いことにちがいない。事実、多くの母親たちが「褒められたい！」と訴えている。

「褒められたい」のは、専業主婦に限ったことでは当然ない。子育て中の母親は、誰でもみんな自分がこんなに子育てで頑張っていることを、褒めて欲しいのである。図 C-8-4 に「お母さんは現在仕事をしていますか」と「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果（１歳６カ月児健診）を示している。「ほめて欲しい」は、専業主婦が４８．８％、仕事をしている母親が 39.6％と、専業主婦の方が「褒めてほしい」母親が多くなっているが、大した差ではない。ところが、働らいている母親は褒めてもらえる機会がない訳ではない。そのため、専業主婦の「ほめて欲しい」という欲求は、より切実なものではないだろうか。

図 C-8-4 「お母さんは現在仕事をしていますか」と「ほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果（兵庫、1歳6カ月児健診）



C－8－3 親たちの心の発達課題

― 「自己実現」と「親の役割」とのバランスをいかに取るか ―

子育てをしながら仕事をされている母親は、肉体的にも精神的にもたいへんである。仕事をされている親に対する子育て支援は、当然であり、多くの方が理解しやすいものである。しかし、現代の特徴は在宅で子育てをしている母親の方がより危機的状況を抱えていることである。それはなぜか。

今の世代は「自己実現」をテーマに育てられてきた経過がある。結婚するまで、子どもが生まれるまでは自分の好きなように時間を使ってきた世代である。ところが、赤ちゃんが生まれた途端、自分の時間がまったくなくなってしまう。６０歳くらい以上の世代であれば、小さいときから家に帰えれば農作業など家の仕事が待っていた。自分がしたいと思うことを押さえて、家の手伝いもしてきた。人間にとって経験ほどたいせつなものはない。初代専業主婦と現代の母親たちとの生育歴での体験の違いは、その中ではぐくまれた価値観や思考、感覚などに大きな変貌をもたらしている。

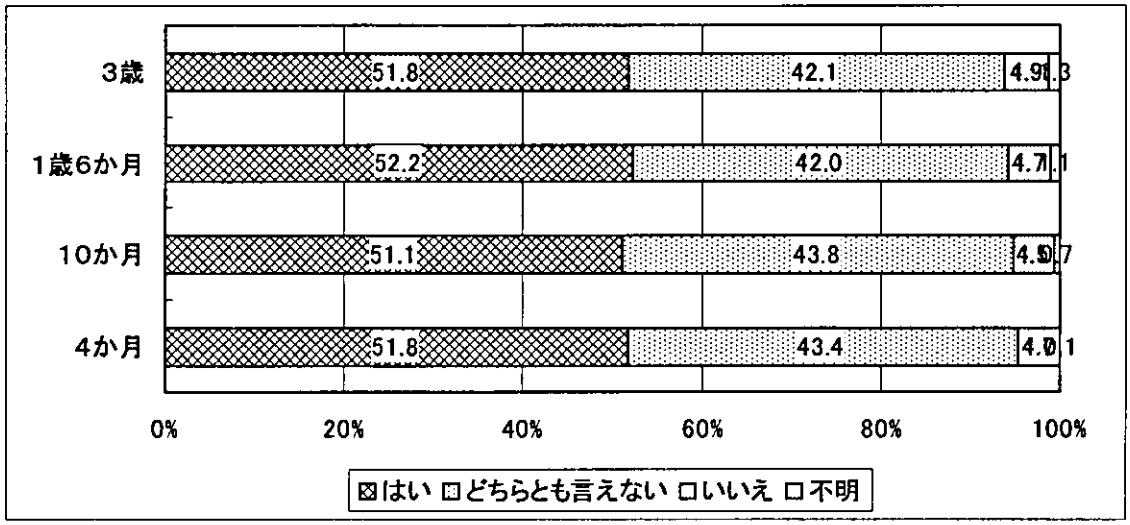
現代の母親にとっては、四六時中自分を拘束され、したいことが何もできないという体験は初めての体験である。かつて経験したことのない体験がどれほど精神的ストレスの高いものであるか、は想像に難くない。というより、６０歳前後の世代の想像をはるかに超えているのである。子育ては「自己実現」とは対極の「自己犠牲」の世界という面が歴然とある。

図 C-8-5 に「あなたは、自分の思い通りにものごとをすすめたい方ですか」という質問の結果を示す。本項の質問のすべてが「大阪レポート」にはなかった質問のため、比較できないのが残念である。図 C-8-5 の結果では、「自分の思うように物事をすすめたい」という母親が半数を越えている。これが多いものかどうか、比較するデータがないので定かではないが、多いような気がする。一方、子育ては母親の思うようには

いかないものである。母親の思うように子どもを支配してもらっては困るのである。早期知育教育とか、スポーツ選手や芸能関係など、親は子どもにいろいろな期待をかけて子育てをしている。子どもの人生を親の思うように操作して、子どもの人生で親の「自己実現」を図るという事例が多々見受けられる。これも「自己実現」というテーマで育ってきた現代の親ならでの現象ではないだろうか。しかし、子どもの人生を使って、親が親自身の「自己実現」を図ると、子どもの心の発達は歪む。

図 C-8-5　あなたは、自分の思い通りにものごとをすすめたい方ですか

（兵庫、2003 年）



親としての役割を果たすためには、自分のしたいことを一時的に横に置いておくことも必要である。言わば「自己犠牲」が必要なのである。そのため、子育てしている年齢の親の心の発達課題は、自分個人としての「自己実現」と「親としての役割」とのバランスをどのように取るか、ということになる。この心の発達課題に遭遇し、戸惑っているのが現代日本の親たちである。カナダの親支援プログラム“Nobody's Perfect”は、そのような心の発達課題を親たちが乗りこえることを支援するプログラムでもある。

本節の問題から出てくる児童虐待予防策はすでに挙げた児童虐待予防対策③「親を親として育てる親支援プログラムの広範な実施」とともに、日本社会のあり方そのものに触れるものにならざるを得ないが、

児童虐待予防対策⑯：日本人の働き方の見直し、親がいきいきと子育てができ、しかも社会参加できる社会の実現

である。

Ｃ－９　新しい子育て支援メニュー：親支援プログラムを展開しよう！
― 対人関係の脆弱性を改善する―

これまでに紹介したように、日本の子育て現場はこの２０数年の間に、我々の想像をはるかに超えて大きく変化していた。本章の最後に、児童虐待との関連でよく言われる親たちの対人関係の脆弱性について考える。そして、今後の子育て支援・次世代育成支援のあり方、特にカナダや米国では２０年来ひろく実施している親支援プログラム、について述べる。

Ｃ－９－１　経験不足による親たちの戸惑い

「大阪レポート」においても親たちの子育ての困難感は強く感じた。しかし、「兵庫レポート」が明らかにした母親が訴える子育て困難感はさらに大きくなっているように感じる。育児困難の原因として、まず第１にあげられなければならないのは、自分の子どもを生むまでに、小さな子どもに触れる機会が急激に失われつつあることである。図 C-2-2 に示したように、「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さな子どもさんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか」という問に、「ない」と答える母親は５５％と半数を超えている。「自分の子どもを産んで、初めて赤ちゃんを抱く」という母親が増加しているとは 1980 年当時にも言われていたが、その傾向はますます顕著になっている。

その人にとって経験ほど大切なことはない。人は経験から学ぶのである。小さな子どもとのかかわりの経験がまったくないままに、自分の子どもを育てなければならない母親の不安と戸惑いは、５０歳代以上の世代には想像できないほど強いものであろう。よく「母性本能」という言葉が使われるが、母親だからと言って、生まれながらに子育ての方法が身についている訳では決してない。母性は育つものであり、まわりのいい環境により引き出されるものであることを「大阪レポート」は証明している。だからこそ、すでに述べた児童虐待予防策③「親を親として育てるための親支援プログラム（Nobody's Perfect など）の広汎な実践」や④「小・中・高校生や大学生など、将来親になる世代が乳幼児と触れ合う機会を意識的に作り、親になるための準備性をはぐくむこと」が必要なのである。

Ｃ－９－２　子育ては予測が立たない出来事の連続

図 C-4-1 に示した「自分の子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは違いがありましたか」という質問結果では、「おおいにあった」という母親が３人に１人以上であった。この質問は、想像していた子育てと現実とのギャップを聞いている。そして、想像と現実のギャップがきわめて大きいことがわかった。このことは、先に述べた経験不足とも深く関係したことである。乳幼児を知らないままに、頭で想像していた子育てと現実の子育てがあまりにも異なり、母親の精神的ストレスの原因になっているのである。

このような見方とは別に、本来子育ては予測が立たない営みであり、想像と現実に